

た な か み 山

第 10 号
行 具
桐 生 民
ク ラ ブ

上田上荘園の歴史

金勝寺・膳所藩領の境界石柱確認(上)

山 本 文 良

去る八月二十七日。瀬田史跡会の
用件で、私は平野町のY氏宅をお訪
ねした。

話が一段落したところ、ご主人が
「ちよつとこれ見て下さい。ご存知
ですか。」と席を立たれたので、後
について行くと一基の石柱があつ
た。

これ何ですかと尋ねると、「ここに
文字が刻んでいます。」とのご返事。
ハッキリ見えないので指でたどると
『従是西膳所領』と書かれている。思
わず私はびつくりした。これは、境
界の印ですね。平野町にあつたので
すか。「そうです。平野町内にあつた
のです。」これは、平野町の歴史を語



金勝寺領石柱(平野町)

とても貴重な証である。
でも、もう一基あつたはずですね。
どこに藩ですかと聞くと、「いや、金
勝寺領です。」それは、どこにありま
すかと、キョロキョロすると、「T氏
宅にあります。」『従是東金勝寺領』
ウワァー!両方揃っているなんて、こ
んなすばらしいことはない。これは、
単に平野町だけでなく上田上の歴史
に関わるかも知れない。と私は少し
興奮してきた。

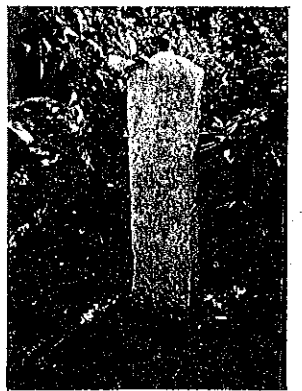
石柱の後ろ側の角には、今もクツ
キリと割石のノミの跡が残っている。
新しい時代のもので違って、孔の縦
横の長さは荒く大きかった。その時、
今年の七月、瀬田史跡会の「天ヶ瀬
発電所と南山城地方の史跡めぐり」
の一端として、有名な淀城跡の見学
を思い出した。今は、本丸と内堀の
一部を残すのみとなっているが、
石垣のことについて雑談的に話し
ていたら、桐生町の山本清春氏が
「この石の割り方は、江戸時代のも

のです……」と詳しく説明して下さ
た。その条件にピッタリ。
膳所藩。膳所城(水城)。江戸時
代。絶対間違いはない。栗東町の
金勝寺の寺領が平野町にあつた。
残念ながら不勉強な私には初耳だ
つた。

早速、学生時代の大先輩である金
勝寺のご住職と栗東町役場の町史編
さん室の教え子へ電話を入れた。「即
答はできないが、古文書を調べる。」
とか「それは、貴重な発見だ。一度
是非拜見したい。」とのこと。
栗東町林の薬師堂の側に、すごく
立派な太字で彫りの深い『従是東膳
所領』の境界石柱があつたが、今は、
町の民俗歴史博物館に保存展示され
ているから、上田上学区にあつたと
しても不思議ではない。

しかし、特に寺領と藩領の両方が
揃っていること。金勝寺の寺領石柱
あつたことは、一層価値があると思
う。
ちよつと話しがそれるが、金勝寺つ
てどんな寺院か簡単に説明しておく
ことにすると、この寺院は、今から
千二百五十八年前の奈良時代天平五
年に聖武天皇が、都や大仏建立が無
事に行われることを願って良弁僧正
に造らせたものであり、東大寺の大
仏建立のかけにかかれた日本歴史の

一こまである。
両石柱発見について、Y氏、T氏
は共に語って下さつたが、スピース
の都合で残念ながら省略することを
許して欲しい。
元にかえつて、さらに文化ゾーン
の県立図書館や大津歴史博物館にお
世話になり、次の資料を得た。
おそらく明治の初めに記録された
ものと思われる『旧高旧領取調帳』
によると、
大鳥居村
○膳所藩―二七四石六升五合
○金勝寺―四石一斗四升四合六勺七
才
○稻荷社―二石二斗三升八合
○白山神社―一石一斗一升八合
桐生村
○膳所藩―六一五石八斗三升二合
○金勝寺―一三三石九斗二升一合
牧 村
○膳所藩―五三六石四斗七合七勺
○金勝寺―七七石七斗六升七合九勺
一才



膳所藩領石柱(平野町)

平野村

○膳所藩一四七二石一斗七升一合

○金勝寺一三六石五斗二升

一才

中野・芝原・堂・新免の各村は、膳所藩領有であるため省略。

『上田上村誌』明治二三年四月編

によると、

大鳥居村

○膳所藩一三〇石五斗

○金勝寺一六石

桐生村

○膳所藩一六一四石三斗五升

○金勝寺一三六石五斗二升

牧村

○膳所藩一三六石五斗二升

○金勝寺一七七石七斗六升八合

平野村

○膳所藩一四七五石一斗八升

○金勝寺一三〇石五斗

新宮神社の七不思議(下)

新免町元宮総代 西村 喜八・山崎 勲

一、神主(ミヤモリ) 選びの神事

毎年九月第一か第二日曜日に、湯立祭(八朔祭)が行われます。この祭は、神様に二十十日の厄日が無事にすぎたことを感謝し、さらに豊年万作を祈願するのです。

この祭りが終わると新年度の神主(ミヤモリ)を選ぶ神事があります。

前年度の総代や神主が、各氏子の氏名を書いてたたんだ小さな紙片と伊勢神宮のケンサキサンというお札を三方に入れ、捧げ持つて神前にぬかずきます。

祝詞をあげ、ケンサキサンの中に入っている割箸のような芯を取り出して、その先に巻いている細い紙をほぐして紙片の上に垂らします。

これを静かに何回かまわしているうちに、神意が通じるのか不思議とその中の一枚が釣り上げられます。いや、吸い着くのかわかりませんが引つきます。

これを三方にいただき、氏子全体

中野・芝原・堂・新免は、膳所藩領のみで転載省略。

以上により大鳥居・桐生・牧・平野の四村に金勝寺の寺領(荘園)があったことが判明する。

尚、今回の調査でわかり、非常に残念に思ったことは、四つの資料のうち、半分の二つが上田上学区または、大津市内でなく、他の町や機関に保存されていたことである。

に神告を披露して、一年間の神主が決まります。

二、左義長の神事

毎年一月十四日の午後になると「初普請」または「初出」といって、各家から一人ずつ大人が左義長の準備に出ます。

各家からお正月のしめ飾りや竹や藁を持ち寄ります。

祭典は、翌十五日の早朝。神殿からお光をいただいて点火されます。火は、見る見る猛烈な勢いで燃え上がります。

この場所は、広い空地ではなく、周囲には、いろんな木が生い茂っています。それなのに、決して燃えうつりません。

普通だったら完全に火事になりまして、いくら考えても納得いきません。

三、社紋の秘密

新宮神社のご紋章の一つに「下り藤」があります。ご祭神が三柱だからいいじゃないか。そうはいかない。諺に「火のない所に煙は立たぬ」と言われています。

昔から「桐生は新免の出郷。」つまり「分れ」だと言われています。桐生の箭簀神社は、京都市左京区にある吉田神社のご分身。吉田神社は、奈良市の有名な春日大社のご分身。春日大社は、藤原氏つまり「大化の改新」で有名な天智天皇の片腕とまで言われた藤原鎌足の祖先神です。

そんなところから藤の紋章が使われ、桐生の氏神様にも「下り藤」の中に、二本の矢が交差した図案になっています。

新免で藤に関係のあるところと言えば、正しく言えば下田上学区の羽栗になるが、村はずれに「藤の森」があります。

村の伝承によると、いつの時代かわからないが藤原氏に縁のある人が新免の田上中学校辺に住みついたので初まりで、当時としては藤原氏の旗色が悪く「藤原姓」を名乗れなかったので「藤の木」を村はずれに植えて子孫にそれとなく伝えようとした



神のお告げ

撮影 西村利隆
提供 西村俊夫



牛でのしろかき

旧来の米作りとその苦勞(上)

ふれあい村資料館 山本三郎

のだと……。それを氏神さんにも「下り藤」の紋章を入れたのではないかと推測されています。

一口に言うとは、新免も桐生も藤原氏の血縁者らしいのです。

藤本・藤田・進藤・遠藤のように

「藤」の文字が、上または下についた姓名がたくさんあります。あれは総べて「藤原氏」縁の人と言つてもよいのだそうです。

しかし、故あつて全然関係のない姓を名乗っている人達もあります。

☆苗代づくり

五月初めの「村祭り」が済むと苗代づくりが始まります。

○田圃の土を鋤で細かく掘り起こして、短冊形の苗床を作ります。

○水を入れて、鋤で掻きまぜ土をやわらかくします。(捏ねる)

一畝毎に水しぶきが飛び散り、顔も衣服も土ろんこになります。種を

まくようにするまで約半日。かがみつ

ばなしの仕事なので、腰が痛くなり疲れも次第に出てきます。

☆種播き

苗代づくりと平行して、川の水で種籾を浸したり、桶に塩水を入れてよい種を選別します。

この時期に限って、風が吹き種が溝の方へ飛び散る(横殴り)ことがあるので、姿勢を低くして播きます。

品種を間違えたり、混じったりすると大変なことになるので、印を付けたたり、木札をたてたりして常に注意します。

雀などがついばまないように、お

どしや網や糸などを張ったり、水の加減にも毎日気を使います。

☆田植え

「早乙女」なんてきれいな言葉があります。田植えは女の仕事。一日中足を水に浸して腰はまがりつばなしです。

田植えが始まるまで、牛に唐すきを引かせて土をだんだん細かくすきます。さらに水を入れてすいたり、こねたり、馬鋤も使つて水田に仕上げます。こね方もやわらか過ぎると早苗が倒れ、かた過ぎると植えるの力がいり手の指を痛めるので、こね加減も中々むずかしい仕事です。

一日でも早く植えることも、収穫に大きく影響します。このため、近所同志や親せきで組をつくり「ユイ」と言つて手伝い合いをします。

苗運び・縄張り・苗配りも男の仕事です。

特に、縄(水縄)張りは、簡単な

ようでもむずかしく手間もかかります。まず、田圃の形によって縄の引き方がちがうので、規準を決めて一本縄を引きます。後はそれに沿つて間竿(ケンザワ)、間尺で測つて縄を引きます。

また、弱つた縄や距離が長いと途中で切れることがあります。さらに足りない時は継ぎたします。

まっすぐ同じ間隔に植えてあると後の施肥・除草・田押車の使用あるいは歩行など仕事が極めてスムーズに進みますので、縄の引き方は一番重要なのです。

一筋に一人入つて、早苗を三〜四本を一株にして横に六〜七株植えていきます。

田植えが始まったら、田の大小にかかわらず一枚全部植え終わるまで仕事の手は休みません。まして二日にわたることなど絶対にしません。

☆草取り

六月中旬から七月中旬までの暑い最中の仕事です。

「一番取り」と言つて稲株のまわりの土を攪拌したり、雑草のヒエを取ります。「二番取り」は、田押車を使つて表土を攪拌します。「三番取り」は、「仕上げ取り」とも言つて雑草を全部取り除きます。

この頃になると、稲の丈が長くなつて顔や目に突きささることもあります。また「草いきれ」と言つて、稲株と稲株の間の空気は水と太陽で蒸されてムンムンします。

背中や顔はカンカン照り。顔や鼻はムンムン。体中は汗ビツシリ。足は煮え湯。全く地獄の三丁目です。毎日この連続。想像しただけでも恐ろしくなります。

背中はカンカン照り。顔や鼻はムンムン。体中は汗ビツシリ。足は煮え湯。全く地獄の三丁目です。毎日この連続。想像しただけでも恐ろしくなります。

☆肥料やり

殆どが尿素系で、速効性のものばかり。地力は、堆肥(牛舎内の糞と牛の糞尿)。田圃の畦草を鋤きこむ人もいますが、冬の時期には牛の資料がなく、真夏に乾燥させて保存して置く家が大部分です。

肥料のやり方の上手下手は、稲の

成長や収穫を大きく左右します。昔から反収について面白い言葉があります。「立つたり六俵・じつわり八俵・寝たり十俵。」一俵とは、玄米で四斗。目方にして十六貫(約六十kg)です。堆肥の運搬は、大八車に乗せて田の近くまで行きますが、行けない所は途中からモッコに入れ、棒で肩にかついで運びます。

田圃の中へは、持てるだけ持って片手で株と株の間へ置いていきます。この作業も日照り・草いきれ・匂い汚れと大変な重労働です。
☆畦での仕事

農家の人びとは、田圃は勿論ですが畦の狭いわずかな土地でも決して無駄にはしません。

田植えが終わると、大豆や小豆の種を畦のふちに植えます。少しすると、肥料になる灰をやります。この灰は、カマドや風呂を炊いた時にできる灰などです。

畦に生える草は、牛の飼料として何回も刈り取ります。この時、大豆や小豆は刈り取らないよう細心の注意を払います。

昔から誰言うもなく、「平野と桐生へは、嫁に行くな。」だったのです。草は、冬の大切な牛の食べものだったのですが、一日中土手で草を刈るのは……。

上田上の道しるべ(3)

山本文良

大戸川に架かる荒戸橋の西。橋の袂に一对の大きな常夜灯が建てられている。

一見橋の向こうの山裾に荒戸神社の大鳥居がある。ああ、この灯籠は荒戸のお宮さんのだなあと一瞬錯覚を起こす人が多い。

灯籠の竿の部分に「不動明王。」基壇の上部には「万人講」と写真のように陰刻されている。

つまりこれは、田上不動寺の上田上側からの表参道の印である。だから私は敢えて「道しるべ」の中にいれない。

ちよつと話が横にされるが、昭和二十年ごろまでは大戸川に架かる橋のうち一番立派な板橋である。どうしてだろうか。もうおわかりの方もあられるでしょう。



「不動明王」常夜灯(中野町)

田上山には、約千百年前「不動寺」が建立され不動明王がおまつりされている。ここは山岳霊場の一つであり、今も「大会式」になると、京阪神やその他からも山伏衆が来山。大護摩供を奉修し、普段でも近郷からの信者の参詣者が後を絶たない。

ひるまじい今日は!

おおつ何十年振りの田上山

大戸川お前も元気がよく頑張ってくれた

おいしいおいしい田上米
もう何も言うことはない
しかし村は変わったなあ

訂正とお詫び

第九号三ページ四段二十二行目の

大正十二年(一九二五年)を明治十

二年(一八七九年)に……

従って記載順序も前後します。訂正して深くお詫び申し上げます。

第10号発刊に思う

感謝と感無量

山本文良

学生時代の友人N・Y氏から、次のような電話をいただきました。

「創刊号の時は、中なか面白いことをやるな!」

「2〜3号の頃は、いつまで続くかな?」

「5〜6号では、やりよるな!」

「9号、よくやるわい!」

友人の率直なご感想、とても嬉しかったです。

途中で棒を折るくらいなら、初めからやらないぞ。そんな大それた決心で取りかかりました。それは、私の夢だったのです。

えらそうなことを言っても、やはり晴れの日雨の日がありました。それだけに、今日の第10号の発刊感無量です。

しかし、いくら一人が頑張っても駄目です。今日までお寄せいただいたご投稿・ご指導・取材ご協力・ご激励・お礼のお便りやお言葉。本当に本当にありがとうございます。

皆さんが、私を暖かく見守り支えて下さったおかげです。だからだから、第10号が発刊できました。

重ねて、心からお礼申し上げます。ありがとうございます。

尚、今後共よろしくお願い申し上げます。

桐生民具クラブ代表 山本文良

電話 公社 四九一〇〇七七

有線 五六七八

